



## 安全装備品と消防活動



広島県大竹市消防本部

### 1 はじめに

大竹市は、広島県の西部県境に位置する臨海工業都市です。人口は、29,447人（平成22年1月1日現在）、東西10.5km、南北14.5kmに渡り、離島2.53km<sup>2</sup>の阿多田島を含む総面積78.55km<sup>2</sup>の市です。

明治22年（1889）の町村制の施行により設置された、木野村、大竹村、油見村、小方村、玖波村、栗谷村が、昭和29年町村合併促進法により合併が行われて大竹市となり、広島県内10番目の市として発足し、現在に至っております。

市域の産業は、古くは農業を主としていましたが、江戸時代には藩の奨励などから山口県との県境を流れる小瀬川水源を利用した手漉き和紙の生産が盛んになりました。その発展は著しく、紙の名産地として現在もその名を馳せております。また、第二次大戦後は広島県と当市の工業都市建設計画により、積極的な企業誘致が行われ、日本初の石油化学コンビナートが建設

され、化学繊維、紙、パルプ、石油化学工業を中心とする大企業が沿岸部に立ち並び、瀬戸内海臨海工業地帯の一角を担い、飛躍的な発展を遂げました。

### 2 大竹市消防団の沿革

当市の消防は、明治16年（1883）に私設消防組が設置され、大正14年（1925）には公設消防組が設置されました。今年には消防組創設85周年に当たります。当市の消防団は、12分団25部、条例定数330名で組織されており、現在、団長1名、副団長3名、分団長14名、副分団長14名、部長26名、班長52名及び団員195名の合計305名で構成されています。その中には女性消防団員が25名おります。

消防団は、団本部車1台、女性消防団の広報車1台、小型ポンプ付積載車24台及び小型動力ポンプ29台の体制で日頃から防災活動や災害に備えるための訓練、広報などを行い、市民の安



石油化学コンビナートを空からみた風景

全と安心のために重要な役割を果たしています。

### 3 過去の災害体験から

平成19年に住宅と商店が密集している大竹駅前周辺で、長時間に渡る建物火災が発生しました。この火災は、夕方から深夜まで長時間に渡って燃え盛る大規模な火災で、多数の消防団員が出動し懸命な活動が行われましたが、幸いにも、消防団員にケガはありませんでした。

ところが、平成20年、日没近くに建物火災が発生し、暗闇での消火活動となり、残火処理の際、足を滑らせ負傷するという事案が発生しました。

平成21年度は、幸いにも消防団員の公務災害



黒煙を噴き上げている駅前周辺



炎上している建物

は発生していませんが、過去の災害やそこで発生した公務災害などから、公務災害を防止するためには、日頃の訓練とともに安全に活動するための装備が必要であると感じていました。

### 4 安全装備品整備等助成事業の活用

当然のことながら、消防団員も安全に活動するための装備については関心が高く、消防団の幹部会で「現在、消防団員は、夜の災害現場に出動した際、懐中電灯を手にもって活動しているが、団員から『安全を確保するための夜間照明として不十分である』、『両手で作業ができないので、効率が落ちる』との声が上がっている。」という意見がありました。

当市としても、過去の災害時の活動から、夜間に活動する際に消防団員の安全を確保するための照明器具を整備することは、安全装備の中でも特に重要なものと考え、「早期に団員へ配備できるよう努めたい」としていたのですが、財政難のため苦慮していました。思うような整備ができない状況の中、平成21年度の予算編成時に消防団の要望を受け財源を模索していた時、消防基金が作成した「消防団員等公務災害補償等実務の手引き」を拝見しましたところ、「消防団員安全装備品整備等助成事業」の助成品のメニューに「携帯用投光器」があったので、消防団員の安全な活動のために、ぜひ、この事業を活用したいと考え、さっそく県を通じて消防基金に助成申請を行いました。まもなく、消防基金から助成決定通知をいただき、「ヘッドランプ」を整備することとなりました。

今回、消防基金から助成を受け整備した「ヘ



ヘッドランプを装着している消防団員

「ヘッドランプ」は、発光ダイオードの光源でとても明るく、軽量で扱いやすいと消防団員にはとても好評です。また、「ヘッドランプ」を装着することで、夜間活動時の安全が確保されることはもちろん、両手が空くので作業効率も増し、活動範囲も広がったということで、消防団員の安全が確保されるとともに消防団活動の向上にも効果が出ています。

本年1月に実施した消防出初式においては、ヘッドランプを装着した消防団員による一斉放

水を行いました。観客からは、出初式の放水の演技に対してたくさんの拍手をいただきましたが、消防団事務担当者であるものとしては、このような晴れやかな場所で、基金からの助成で整備した「ヘッドランプ」をお披露目することができたことを心から喜んでおります。

今後とも消防団員の安全装備品の充実を図るとともに、研修事業を含めた公務災害防止事業を計画的に行い、消防団員の公務災害防止に努めたいと思います。



消防団員による一斉放水（出初式会場にて）